



もくじ

展示紹介
浮世絵に見る波・風・帆 P1
日本浮世絵博物館所蔵浮世絵の波・風・帆 P2, P3
江戸の楽しみ 浮世絵双六と七福神、浮世絵のほれ話 P4, P5
ONIKAGE 学芸員のページ/うきよ場なれ/編集後記 P6

日本浮世絵博物館所蔵

浮世絵に見る **波** **風** **帆**

会期 2019年11月2日(土)~11月24日(日)



歌川国芳 「讃岐院眷属をして為朝をすくふ図」 所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

江の島は、江の島詣を主題にした浮世絵をはじめ、^{ふうこうめいび}風光明媚な名所として、江戸時代から数多く描かれました。海に浮かぶ島(陸繋島)^{りくけいとう}としての姿において、海の表現は必須であり、時代を経ながら多くの絵師たちにより、海景の中に波や風、船の帆、の姿が描かれてきました。

今回の展示では、浮世絵に描かれた波・風・帆の表現をより強く感じていただくため、日本浮世絵博物館の所蔵作品からテーマに沿った名品の数々をお借りして展示いたします。

浮世絵に描かれたダイナミックな波や風、風をはらむ帆をご覧いただき、東京2020オリンピック競技大会では、セーリング競技の会場となり観衆に沸くであろう江の島の姿に思いを馳せていただければ幸いです。

日本浮世絵博物館所蔵浮世絵の波風帆

浮世絵の中に、特徴ある波、風、帆の姿を求めると、北斎、広重、国芳ら、江戸後期から幕末の江戸文化が熟成した時代に活躍した絵師たちに、個性的な描写を多数見出せます。今回の展示では、藤澤浮世絵館の所蔵作品以外に、江戸時代に磨かれた描写力豊かな波、風、帆をご覧いただきたく、藤沢市の姉妹都市である長野県松本市にある一般財団法人日本浮世絵博物館所蔵品の中から、生き生きとした筆致や激しい動きある浮世絵の優品を展示いたします。



葛飾北斎「富嶽三十六景 東海道江尻田子の浦略図」
所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

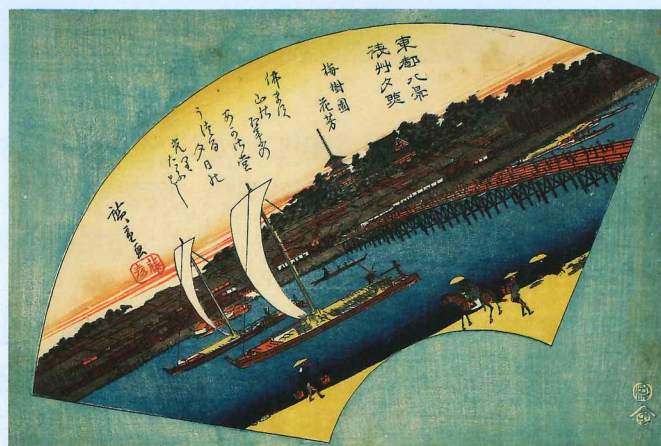
冠雪の美しい富士を背景に、百人一首に詠われた田子の浦の沖に浮かぶ2艘の漁船が描かれています。砂浜には塩焼きでの製塩作業の光景が見られます。船を囲うように波のうねりが力強く描かれ、水の動きをとらえることが巧みな北斎ならではの描写がみられます。背をそらし櫓を漕ぐ漁師の姿は波の重さを強調しており、道理に適った人物の動きを加えることで、画中に説得力を生み出しています。



葛飾北斎「富嶽三十六景 駿州江尻」
所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

富嶽三十六景シリーズ中、神奈川沖浪裏、凱風快晴と並び人気のある作品として知られている本作は、目に見えないはずの風の存在を感じさせる動きある描写が優れています。一葉一葉が細く描かれた草は風に対して大きななびきを見せず、この風が時ならぬ突風であることも表し、風の質感の異なりすら捉えようとした北斎のすごみでもあります。1993年には、カナダの現代芸術家が本作をイメージしたデジタル加工の写真作品が発表されるなど、現代美術にも優れた画面構成が影響を与えています。

古典的な扇面図の中に、江戸の夕景の美しさを切り取った作品です。隅田川をゆく2艘の船の風をはらんだ帆の白さが夕景の中に目立ちます。背景には浅草寺が描かれています。記された狂歌には、「仏在す山の紅葉の藜映る夕陽の光尊し」とあり、浅草寺の観音堂の由来である漁師が観音像を川から引き揚げ、それを藜で葺いたお堂に祀ったことを詠んでいます。



歌川広重「東都八景 浅草夕照」
所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

一般財団法人 日本浮世絵博物館の酒井コレクションについて

一般財団法人日本浮世絵博物館は、長野県松本市の紙問屋の酒井家五代200年間にわたる浮世絵の殿堂として、昭和57年(1982)、長野県松本市の郊外に設立されました。200年にわたる収集は、肉筆、版本を含め、浮世絵の草創期から現代版画までを網羅した10万点に及び膨大なコレクションです。この酒井コレクションは、国の内外でも質の高い有数のコレクションとして知られ、ヨーロッパ、アメリカなど諸外国で展示会が開催され極めて高い評価を受け続けています。



歌川国芳「大物浦平家の亡霊」
所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

兄の源頼朝から謀反の嫌疑をかけられ西国に逃げようとする義経一行を襲う、亡ぼされた平家の亡霊を描いています。船の大きさを凌駕せんとする波のボリュームに、他の絵師にはない国芳のダイナミズムへのこだわりが見えます。国芳は伝説的な物語でも、画中に細かなリズムを表すことに特徴がある絵師です。この作品では、帆が布を合わせた構造であることをしっかりと描いています。また荒れる風雨による転覆を避けるため、義経の

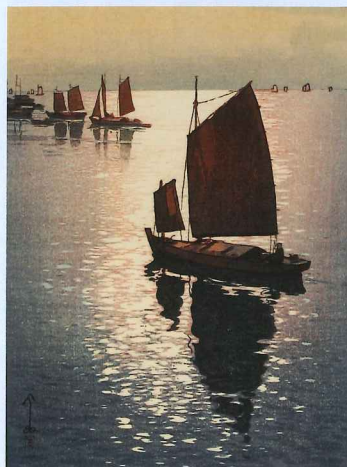
郎党たちが必至に帆を降ろそうとしている姿も現実味があります。浮世絵では定番の平知盛の亡霊も描かず、数珠をもち祈る弁慶でもないところも国芳ならではの趣向と言えます。



二代歌川豊国「名勝八景 大山夜雨 従前不動頂上之図」
所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

作画期が短かった二代歌川豊国の最高傑作と呼ばれる「名勝八景」シリーズのひとつです。雨の表現が特徴的で、背景の大山のシルエットを分断することで、風雨の激しさを感じさせる巧みな構成です。よく見れば急峻に描かれた石段を上げる大山詣りの人物が描かれており、奉納太刀を担いでいる人も見えます。

※大山詣り 現・神奈川県伊勢原市の大山に祀られる石尊大権現(大山阿夫利神社)へ参拝すること。江戸時代に隆盛し、歌舞伎の外題や落語にも多く残され往時の人気の高さがうかがえる。



吉田博「風静」
所蔵：一般財団法人 日本浮世絵博物館

吉田博 明治9年～昭和25年(1876～1950)

福岡県久留米出身。吉田は幼少の頃から絵が好きで少年期に水彩画を学び、18歳で上京して当時全盛であった「不同舎」に入門しその画才に磨きをかけた。

明治32年(1899)23歳の時に一念発起し、朋友の画家中川八郎と共に泰西(西洋)美術を学ぶため渡米し、偶然立ち寄ったデトロイト美術館で幸運にも日本から持参した水彩画が館長から評価され、思いがけず自作品を当美術館で展示することになりました。展示会は好評となり、このアメリカでの成功は、その後も人気を呼び、大正9年(1920)から取り組み始めた多色摺木版画を持参しての大正12年(1923)の再訪では好評となり、これを機に版画のパブリッシング性が活かされ、吉田の版画作品が海外から広く求められるようになっていきました。現在も欧米では吉田博の作品は大変人気があります。

吉田は「水」の表現を得意とし、その一つとして瀬戸内海を題材に美しい海と帆船の絵をシリーズとして描きました。この絵は陽光をきらきらと反射する水面(みなも)を巧みに表現し、その上に影を落とす帆船の静かな様子が穏やかな気持ちを誘い出してくれます。

江戸の楽しみ 浮世絵双六と七福神



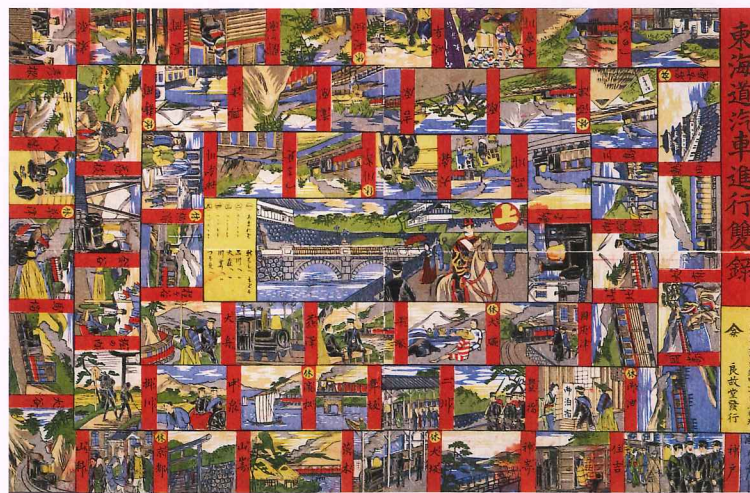
図① 歌川広重「参宮上京道中一覽双六」

双六の起源は古く5～6世紀にさかのぼるとされますが、江戸時代になると印刷技術の発達により、浮世絵を描いた浮世絵双六(絵双六)が誕生しました。絵双六は庶民の娯楽として普及し、その多くは浮世絵師の手により制作されたものでした。

色鮮やかな絵双六は、遊ぶだけでなく鑑賞にも用いられましたが、特に流行ったのが各地への旅行を主題とした「道中双六」で、東海道五十三次を題材とした「東海道双六」は徒歩の旅から汽車の旅に変わっても、昭和に至るまで、たびたび制作されています。

図①の歌川広重「参宮上京道中一覽双六」(安政4年(1857))は、東海道に加えて伊勢参宮の道中も付け加え、みごとに図案化された作品です。

図②の、奈良沢兼蔵「東海道汽車進行双六」(明治35年(1902))の作品では、ふりだしを神戸に置き、宿場を駅名に変えて、大磯=海水浴、横浜=中華街など、当時の時代背景を取り入れたコマの構成となっています。



図② 奈良沢兼蔵「東海道汽車進行双六」

双六は正月に家族そろっての楽しみでしたが、七福神巡りもまた、正月に欠かせない家族の行事でした。縁起の良い神様七名を集めた「七福神」ですが、宝船とともに正月の縁起物として親しまれています。

七福神は一般的には、弁財天、毘沙門天、恵比寿、大黒天、布袋、寿老人、福祿寿となっていて、一定の区域内での七福神巡りが設定されていたり、そろって絵画に収められていたりすることが多いようです。

図③は喜多川歌麿「見立七福神舟遊び」(文化年間(1804～1818))ですが、実は船に乗っている9人のうち大人として描かれた6人の女性と1人の男性の計7人を七福神になぞらえてあり、その謎解きも鑑賞の楽しみとなっています。

また図④の歌川芳員「蚕いとなみの図」(嘉永5年(1852))は、蚕から絹糸を作る作業過程を図にしたものですが、作業の人々に交じって七福神が働いているという、愛されキャラ七福神ならではのユーモラスな作品です。

藤澤浮世絵館展示「浮世絵双六と七福神」では、浮世絵などの絵画資料を通して、江戸の人びとの楽しみ的一端を覗いてみたいと思います。

江戸の楽しみ 浮世絵双六と七福神



図③ 喜多川歌麿「見立七福神舟遊び」



図④ 歌川芳員「蚕いとなみの図」

浮世絵のぼれ話 07

双六の種類に「飛び双六」というものがあります。飛び双六は、止まったマスでサイコロを振って、出た目の数で進むマスが指定され、マスを飛び移りながら上りを目指す遊び方です。現在では、双六と言えば出た目の数を順番に進む「廻り双六」ばかりですが、江戸時代は飛び双六も同じくらい庶民に親しまれていました。

錦耕堂山口屋藤兵衛版「四季たのしみ双六」(図①)は、年中行事や名所が描かれた飛び双六



図① 錦耕堂山口屋藤兵衛版「四季たのしみ双六」

で、「初春(正月)」が上りとなっています。同作品には「江の嶋」のマス(図②)があり、江の島を背景に七里が浜を旅する男女が描かれています。江の島のマスの次の移動先は、1が出れば「初鯉」、2は「涼舟」、3は「大山詣り」など、江の島や海に関わりのある事物などが指定され



図② 図①の「江の嶋」部分

ており、このようなマス同士の関連性を見つけるのも飛び双六の楽しみの一つです。また、上りの「初春」へ進めるマスは「大海日」、「年の市」、「年忘」、「節分」の4か所のみで、せっかく「上り」直前まで辿り着いても初春以外の目が出て番狂わせ、などということもあります。他の飛び双六では、上がり前のコマに「上り」と「振り出し」しかないマスがあるなど、スリル満点なものもあります。江戸時代の浮世絵双六は、細部までじっくり見ると、意外な発見があったり新しい知識に出会えたりして、子どもから大人まで楽しめるものでした。



「七福神、全員集合習合！」

年の瀬が迫って参りました。今回は、お正月と言えばコレ！の、おめでたい七福神についてお話をいたしましょう。

七福神と申しますのは、弁財天、毘沙門天、恵比寿、大黒天、布袋、寿老人、福祿寿の、七名の神様の総称でございます。狂言の演目「夷大黒」や「夷毘沙門」などの存在から、福を授ける神の信仰は室町時代末頃には広まっていたと考えられております。長かった応仁の乱に疲弊した庶民の幸福への希求と、大陸渡来の文物を貴んだ東山文化が背景にあったことが想像できましょう。そして、「仁王護国般若波羅蜜経」の中の「七難即滅 七福即生」に由来し、室町時代の禅僧に好まれ描かれた中国の「竹林の〈七〉賢」になぞらえて、〈七〉福神で描かれ信仰されるようになりました。七福神を参拝すると七つの災難が除かれ七つの幸福（様々なご利益）を授かるっていうことですから、全国に「七福神めぐり」が広まるのもうなづけますねえ。藤沢市内でも、毎年1月に行われておりますよ。

七福神や鬼を払う鍾馗など、幸福をもたらす神仏は「福神」あるいは「福德神」と呼ばれております。「大黒さん」「布袋さん」など、親しみを込めて呼ばれる福德神は、福々しく滑稽な姿で現れ、近世以降の庶民の現世利益の祈願に添えておりました。たとえば、毘沙門天が仏教の護法仏である戦いの神から福の神へと性格を変えてきたように、時代の変遷と社会状況の変化によって徐々に福德神への性格を強め、神仏が習合していったのでございます。そしてその姿も、それぞれが福德神としてふさわしい姿に変わり、そのため、同じ神様でも信仰の変遷による画像のバリエーションがあり、像容は一定しません。おおよその特徴を下の表にまとめてみました。弁財天の腕が2本だったり8本だったり、大黒が米俵に乗っていかなかったりしても、他の特徴で見分けることができるかと思えます。ご参考までに！

江戸では、初夢を吉夢にするために、宝船に乗った七福神の絵が正月二日に枕の下に敷かれました。福は海の向こうからやって来ると信じられていたんですねえ。このように、福神は縁起物として絵や彫刻の主題とされました。「浮世絵双六と七福神」展では、バリエーションに富んだ七福神像をご覧ください。2020年も、皆様に良いことが訪れますように！グッドラック！

七福神 由来早見表

像名	御利益	特徴・持物	出身地	別名（別の表記）
弁財天	財運、音楽、芸能	琵琶	インド	水神サラスヴァティ
毘沙門天	福德、厄除け、病氣平癒	先が三又の矛（ほこ）、宝塔	インド	財宝神クベーラ、多聞天
恵比寿	商売繁盛・五穀豊穡、大漁祈願	鯛、釣り竿狩衣、烏帽子	日本	蛭子、戎、夷、事代主（ことしろぬし）
大黒天	財宝、開運、縁結び	大袋、打ち出の小槌、米俵	インド	シヴァ神の化身マハーカール、大自在天の化身、大國主神、大日如来の化身
布袋	笑門来福、夫婦円満	大袋、はだけた着物	中国（仏教の仏）	僧侶・契此（かいし）、弥勒菩薩の化身
寿老人	長寿延命、諸病平癒	巻物をつけた杖、白く長い髭、長い頭、鹿、桃	中国（道教の神）	南極老人星の化身
福祿寿	長寿延命、立身出世、子孫繁栄	杖、巻物、白く長い髭、長い頭、鶴、亀、宝珠	中国（道教の神）	南極老人星の化身

さて、5ページの図③ 喜多川歌麿「見立七福神舟遊び」の七福神、だれがどの神様だか、おわかりいただけでしょうか？



編集後記

江戸時代に隆盛した浮世絵は、幕末期に向かって、表現方法は巧緻かつ多彩さを増していきます。絵師たちは競うように新しい表現を模索し、おそらく作画の中に自分の個性を実現することも自覚して描いていました。「浮世絵に見る波・風・帆」展では、画像に宿る個性を見ていただけたと思います。また「浮世絵双六と七福神」展では、江戸時代の人々における「暮らし」の多彩な楽しみ方の断片を感じていただければ幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】 [藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索 🔍

